県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

平成10年度

山南遺跡

1999.3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

県営住宅に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度 山南遺跡 1999.3 香川県教育委員会

例　　言

1．本書は，県営住宅建設に伴い平成10年度に実施した山南（やまみなみ）遺跡の発掘調査の概要を収録したものである。
2．調査は，香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3．本年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの調査組織は，以下のとおりである。

総括	所　長	菅原　良弘
	次　長	小野　善範
総務	副主幹兼係長	田中　秀文
	主　査	長尾寿江子
	参　事	別枝　義昭
調査	主任文化財専門員	廣瀬　常雄
	主任文化財専門員	中西　　昇
	文化財専門員	島田　英夫
	調査技術員	糸山　　晋
	参　事	長尾　重盛

4．調査にあたっては，次の機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同敬称略）
香川県土木部住宅課，地元自治会，地元水利組合
5．本書の執筆は中西・島田，浄書は糸山が担当し，中西が編集を行った。
6．本書で使用した遺構略号は，次のとおりである。
SA：柵列　　SB：掘立柱建物　　SD：溝状遺構
7．本書で用いている方向の北は，国土座標Ⅳ系の北である。

本　文　目　次

Ⅰ．調査に至る経緯と経過（中西）……1
Ⅱ．立地と歴史的環境（島田）……1
Ⅲ．調査成果の概要（中西・島田）……2
Ⅳ．まとめ（中西）……9

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置及び周辺の遺跡（S＝1/25,000）……1
第2図　調査区割図（S＝1/1,000）……4～5
第3図　第1遺構面遺構配置図（S＝1/400）……4～5
第4図　第2遺構面遺構配置図（S＝1/400）……6

写　真　目　次

写真1　Ⅰ区第2遺構面SD24（手前），29（東から）……3
写真2　Ⅰ区SB01全景（南から）……3
写真3　Ⅰ区SB02全景（南から）……7
写真4　Ⅰ区SD06（手前），17（北から）……7
写真5　Ⅰ区第2遺構面SD29（南から）……7
写真6　Ⅱ区第1遺構面全景（北東から）……8
写真7　Ⅱ区SB06全景（西から）……8
写真8　Ⅱ区SD01（北から）……8
写真9　Ⅱ区第2遺構面主要遺構（南西から）……9

Ⅰ．調査に至る経緯と経過

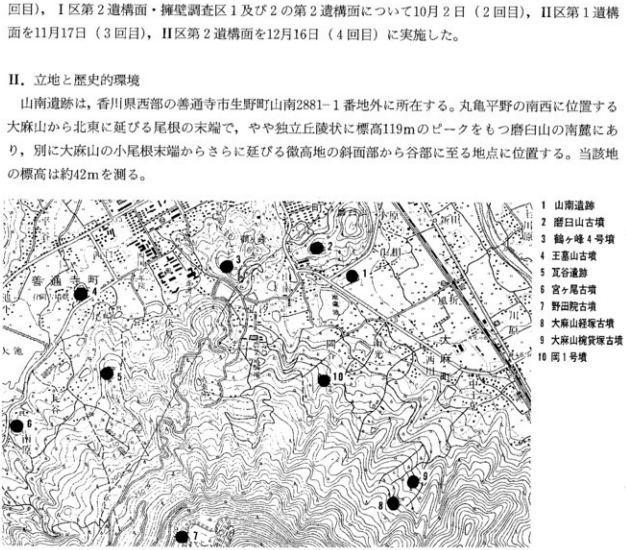
公営住宅（善通寺地区）建設事業に伴い，香川県教育委員会は当該地において平成９年６月と11月に試掘調査を実施し，文化財保護法に基づく保護措置が必要であると判断した。その結果に基づき，香川県教育委員会は財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下センター）との間で，平成10年４月１日付けで「埋蔵文化財調査委託契約」を締結し，本年度センターが発掘調査を担当することになった。調査は，平成10年６月１日から同年12月28日にかけての，およそ７ヶ月間実施した。調査区は対象地の南，建物本体部分にあたるⅠ区，北と西にかけてＬ字状を呈する建物及び付帯施設部分のⅡ区，擁壁工事部分の北辺，西辺，南辺，南東隅の各部分をそれぞれ擁壁調査区１～４とした。調査面積は，Ⅰ区が1,160㎡，Ⅱ区1,150㎡，擁壁調査区１～４が90㎡，270㎡，60㎡，50㎡の合計2,780㎡である。住宅課との協議により，工事工程を踏まえて，擁壁調査区とそれに続けてⅠ区から発掘調査を開始した。

香川県教育委員会の試掘調査で，遺構面が２面あることが確認されており，本調査ではⅠ区の西半分強及びⅡ区，擁壁調査区１・２において下層の遺構面を検出・精査した。その結果実掘面積は，5,220㎡となった。

なお，航空写真測量は，Ⅰ区第１遺構面・擁壁調査区２の南半分・擁壁調査区３について８月５日（１回目），Ⅰ区第２遺構面・擁壁調査区１及び２の第２遺構面について10月２日（２回目），Ⅱ区第１遺構面を11月17日（３回目），Ⅱ区第２遺構面を12月16日（４回目）に実施した。

Ⅱ．立地と歴史的環境

山南遺跡は，香川県西部の善通寺市生野町山南2881－１番地外に所在する。丸亀平野の南西に位置する大麻山から北東に延びる尾根の末端で，やや独立丘陵状に標高119mのピークをもつ磨臼山の南麓にあり，別に大麻山の小尾根末端からさらに延びる微高地の斜面部から谷部に至る地点に位置する。当該地の標高は約42mを測る。



第１図　遺跡の位置及び周辺の遺跡（1/25,000）

周辺の遺跡として，縄文時代までのものはあまり知られていない。弥生時代では，全時期にわたって善通寺周辺での拠点的集落と考えられる旧練兵場遺跡が，当遺跡の北西方向約3kmに所在する。大麻山北西麓の瓦谷遺跡では平形銅剣・中広銅剣・中細銅矛などが出土している。また，近接する磨臼山古墳が立地する丘陵上にも弥生土器の散布が見られる。西方の我拝師山から大麻山西麓にかけての地域は，銅鐸をはじめとする青銅器の出土地として知られている。

古墳時代では，大麻山北西部中腹の標高400mを越える高所に，前期の前方後円墳である野田院古墳がある。前方部は盛土，後円部は安山岩の積石によって築かれている。同山腹にはこの他にも，大麻山椀貸塚古墳・大麻山経塚古墳・丸山1号墳等の積石塚が分布する。盛土の前方後円墳として，東より磨臼山古墳，鶴ヶ峰4号墳，王墓山古墳などがある。当遺跡に近接する磨臼山古墳は全長49mの前方後円墳で，後円部からは過去に，造付石枕をもつ国分寺町鷲ノ山産角閃安山岩製刳抜式石棺が出土している。後期古墳としては，大麻山北東麓の岡1号墳と西麓に宮ヶ尾古墳が所在する。共に，横穴式石室内部に線刻画をもつ円墳として知られている。前者では竪穴住居と考えられる線刻が確認されており，後者では騎馬人物・舟・武人などが描かれている。

《参考文献》

・廣瀬常雄『日本の古代遺跡8香川』保育社 1983

・『善通寺市史』第1巻 1977

・『香川県埋蔵文化財調査概報』香川県教育委員会 1984

III. 調査成果の概要

調査区は，建物本体部分と付帯施設部分をⅠ・Ⅱ区，用地造成時の擁壁工事部分を擁壁調査区1～4として設定した。

調査対象地の地目は水田である。基本層序は耕作土・床土・部分的に残る灰褐色土の古代～中世包含層を経て，地表下0.3～0.5mで第1遺構面に至る。更に暗褐色ないし暗灰褐色粘質土下0.3～0.5mの，灰黄色シルト・粘質土の上面で第2遺構面が存在する。

Ⅰ・Ⅱ区，擁壁調査区合わせて第1遺構面で検出した遺構は，掘立柱建物15棟，柵列11条，井戸3基をはじめ，多数の土坑，柱穴群，大小の溝状遺構等がある。近世以後に削平を受けているためか，第1遺構面では中世の遺構が大半を占めるものの，古代及び近世の遺構も同一面で検出している。なお，この面における検出遺構は，北寄りのⅡ区付近で密度が高い。

第1遺構面における主たる出土遺物は，8世紀代の須恵器（坏・坏蓋・甕等），中世後半の土師器（坏・小皿・羽釜・鉢等），須恵器（東播系捏鉢・甕等），青磁・白磁碗，近世のものでは肥前系染付，土師器，瓦等がある。

下位の第2遺構面では，Ⅰ区においては弥生時代後期の溝状遺構，Ⅱ区では北西隅で弥生時代前期の溝状遺構や風倒木痕等を，東端でⅠ区から続いていると思われる弥生時代後期の溝状遺構を検出した。主たる出土遺物は，弥生土器（前期・後期）の甕・鉢・高坏等，石鏃，磨製石斧等がある。

以下，調査区ごとに主な遺構と遺物について概略を述べる。

(1) Ⅰ区

第1遺構面では，西端で古代の溝状遺構を検出したほかは，主として中世及び近世の遺構を検出した。

中世の遺構は，掘立柱建物２棟及び柱穴群，土坑，Ｉ区の大半に広がる鋤溝群等である。近世の遺構としては，東端の南北に延びる２条の溝状遺構と途中から東に分岐する溝状遺構が主なものである。南北溝のうち東側のものからは，18世紀代の肥前系染付が出土している。また，遺構配置図には図化していないが，前記の溝状遺構を切るように両岸付近で，拳大以上の礫が詰まった土坑状の攪乱を多数検出した。やはり18世紀代の肥前系染付が，礫に混じってかなり多く出土しており，近世の開墾時に田畑の礫を集めて投棄したものと思われる。

下位の第２遺構面では，希薄ではあるが主として弥生時代後期の遺構を検出した。調査区のほぼ中央部では，南から弧を描いて北に延びる溝状遺構と，それを部分的に切ってクランク状に蛇行しながらやはり北上する溝状遺構，後者からオーバーフローした部分，若干の柱穴群等を検出した。西端では，擁壁調査区３の西端近くからⅡ区南部へゆるく蛇行して続く溝状遺構と，途中まで並行する溝状遺構，その周辺で柱穴群を検出した。

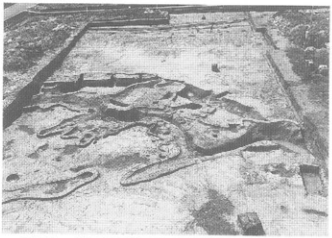


写真１　Ⅰ区第２遺構面 SD 24（手前），29（東から）

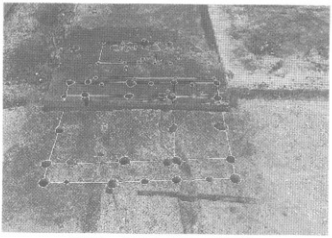


写真２　Ⅰ区 SB 01全景（南から）

SB 01

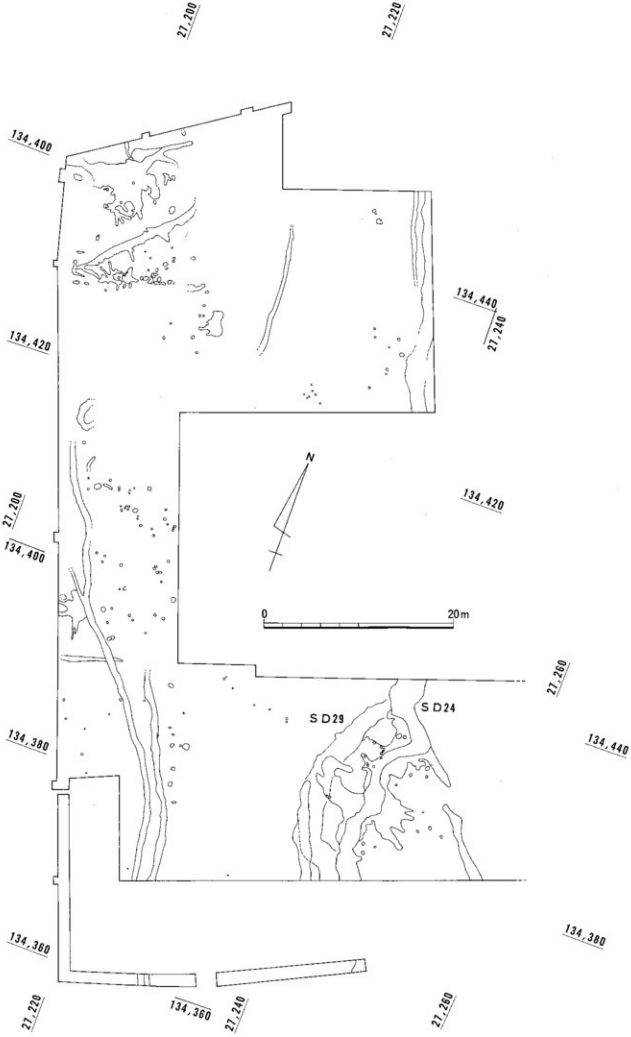
Ⅰ区北西部で検出した掘立柱建物で，北辺と南辺に庇を備えた東西棟である。梁間２間（4.2m）×桁行４間（7.5m），面積31.5m²を測り，主軸方位をN70°Eにとる。柱穴掘り形の平面形は不整円形，断面形はU字状を呈し，径0.3～0.5m，深さ0.3～0.6mを測る。埋土は灰色系砂質土及び粘質土と，灰黄色系シルトである。一部の柱穴には柱根が遺存していた。柱穴からの出土遺物は土師器坏・小皿・須恵器椀・青磁細片等があり，13世紀の遺物も混じるが，殆どが14世紀代の所産である。SB 01北辺柱穴列と並行する形で，北側に東西に延びる柵列（SA 01）を延長6.2m検出した。

SB 02

Ⅰ区中央部からやや西寄り，北壁に柱穴の一部が入り込む状態で検出した南北棟で，総柱の掘立柱建物である。検出した部分について，梁間２間（3.8m）×桁行３間（6.4m），面積24.3m²を測り，さらに北の調査区外に延びる可能性がある。主軸方位は，N22°Wにとる。柱穴掘り形の平面形は不整円形，断面形は不整U字状を呈し，径0.3～0.4m，深さ0.4～0.7mを測る。柱穴埋土はSB 01同様灰色砂質土及び粘質土と灰黄色シルトである。柱穴からの出土遺物は，土師器小皿と須恵器の細片であり，時期は14世紀代と考えられる。なお，SB 02と合致する主軸をもつ柵列を，SB 02の西側（SA 02）と東側（SA

第2図　調査区割図（S＝1/1,000）

第3図　第1遺構面遺構配置図（S＝1/400）



第４図　第２遺構面遺構配置図（Ｓ＝1/400）

03）で検出した。柵列を構成する柱穴からの出土遺物は土師器細片ばかりで年代を特定できないが，SB 02との位置関係から同時期の所産と推察できる。

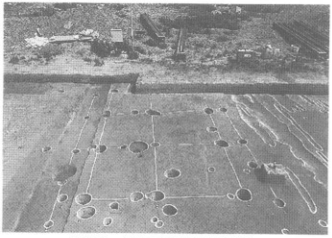


写真3　Ⅰ区 SB 02全景（南から）

SD 06・17

両者とも調査区の西端近くで検出した溝状遺構である。

SD 06は，検出長11.5m，幅0.65～0.73m，深さ0.12mを測る。断面形は浅い椀底状を呈する。南西から北東に直線的に流れる。主軸方向はN32°Wである。埋土は黒褐色砂混じりシルトである。8世紀代の須恵器坏・坏蓋片が出土している。

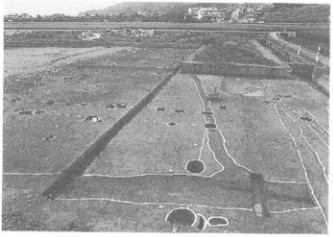


写真4　Ⅰ区 SD 06（手前），SD 17（北から）

SD 17は，SD 06とT字状に直交し，南東から北西に概ね直線的に流れる溝状遺構である。主軸をN32°Wにとる。一部調査区外に出ているが，その部分を含めての検出長は11.5m，幅0.3m，深さ0.07mを測る。埋土はSD 06同様黒褐色砂混じりシルトである。やはり8世紀代の須恵器片が出土している。北端の合流点ではSD 06の方が深いが，埋土の状況から切り合い関係は認められなかった。また南端では，やはりT字状に直交して2mほど北東に延びる溝状遺構を検出している。

写真5　Ⅰ区第2遺構面 SD 29（南から）

SD 29

Ⅰ区第2遺構面のほぼ中央部で，南から北に大きくカーブして流れる溝状遺構である。検出長22m，幅2.2～2.7m，深さ約1.1～1.3mを測る。埋土は上層は灰黄褐色砂質土，下層は灰褐色シルトである。下層から，完形品を含む弥生土器がかなりの点数出土した。壺形土器・甕形土器・高坏形土器・鉢形土器等で，その殆どが弥生時代後期後半の所産であることから，同時期に機能していたと考えられる。

(2)　Ⅱ区

第1遺構面では，13棟の掘立柱建物や柵列を含む夥しい数の柱穴群，大小の溝状遺構，3基の素掘り

井戸跡，土坑等が集中する。一部に近世の遺構が混在するが，大半は中世後半のものである。掘立柱建物は，13棟のうち10棟が極めて近接もしくは重複している。また，東端では幅3.8mの大溝を検出している。

第2遺構面では，東端で中世の大溝に切られる状況で，Ⅰ区のSD 29の続きと思われる弥生時代後期の溝状遺構を検出したほか，北西端では弥生時代前期中葉頃の溝状遺構や不定形土坑，風倒木痕等を検出した程度で，遺構密度は希薄である。

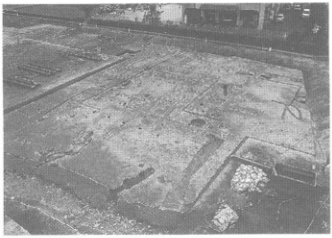


写真6　Ⅱ区 第1遺構面全景（北東から）

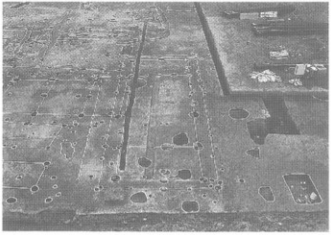


写真7　Ⅱ区 SB 06全景（西から）

SB 06

本遺跡の中でも最も規模の大きい掘立柱建物である。梁間2間（3.9m）×桁行5間（12.4m），面積48.4m²を測る。主軸方位はN72°Eを示す。柱穴の数は異なるものの，ほぼ左右対称の間仕切りをもつ特異な平面プランを呈する。柱穴は，平面形が円形もしくは長円形，断面形はやや開くU字形か長方形で，その規模は径0.4～0.6m，深さ0.6m以上のものが多い。埋土には多量の焼土が堆積しており，通常の土が殆ど見られない柱穴も多い。本遺構の周辺の検出面や，他の掘立柱建物の柱穴埋土からも若干の焼土粒が認められるが，SB 06の比ではない。柱穴の中には根石や柱根の残るものもある。また，SB 06を取り囲むように柱穴が並んでおり，四面庇とも考えられるが，南辺の一部に，建物の柱穴と対応していない箇所や，主軸がわずかに屈曲している箇所があることなどから，建物を囲む柵の可能性もある。柱穴からの出土遺物は，土師器坏・小皿などの細片ばかりであるが，概ね14世紀代の所産と考えられる。

SD 01

調査区東端で検出した大溝である。わずかにカーブしているがほぼ直線的で，主軸をN 30°Wにとる。検出長24.3m，幅3.8m，深さ0.5～0.6mで，断面形は途中にテラス状の段をもつ皿状を呈する。底は礫層上面となる。埋土は上層が灰褐色シルトで，下層が灰色砂質土である。出土遺物は，青磁・白磁・東播系須恵器捏ね鉢・土師器（坏・皿・羽釜脚・

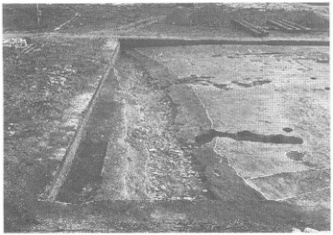


写真8　Ⅱ区 SD 01（北から）

鍋等）などであるが，殆どが細片である。遺物から，掘立柱建物群と同様14世紀頃と考える。

（注）後者の溝状遺構は，第２遺構面としＩ区から擁壁調査区２にかけて検出した溝状遺構より，５cm程低いレベル（層位が一面下）で検出した。

Ⅳ．ま　と　め

山南遺跡の調査においては，第１遺構面で中世後半の集落とそれに付帯すると思われる溝状遺構を中心に古代及び近世の諸遺構を検出し，第２遺構面では，弥生時代前期及び後期の溝状遺構を検出することができた。

本遺跡の中心は，やはり中世後半，室町時代の掘立柱建物群を中心とした遺構群といえるであろうが，調査中から見え始めた幾つかの問題点を整理してみることにする。

まず，SB 06の存在である。本遺跡で検出した掘立柱建物群の中でも傑出した規模をもち，また左右対称の間仕切りを有している。柱穴も規模が大きく，根石の中には礎石にしてもよい大きさのものも含まれる。単なる農村の民家とは考え難い規模と構造である。また，その埋土は充塡したかのように焼土が堆積している。このSB 06については，その性格についてのみならず，各掘立柱建物の併存・前後関係の検討から，集落の変遷とその集落内における位置付けが，本報告書に向けての課題となろう。

次に，本遺跡における条里制の問題がある。本遺跡の掘立柱建物群の主軸は，僅かな差異はあるものの，概ね現在の地割と共通し，大きく異なるものはない。これらの地割の主軸はN20°Wであり，丸亀平野の条里地割の主軸方位であるN30°Wとはかなりずれている。調査区西辺に沿って南北に延びる溝状遺構は，すぐ西の現農道と用水路の下に入り込む。この溝状遺構からは，肥前系の染付が出土しており近世の遺構と考えられる。これらのことから山南遺跡周辺の地割は，遅くとも室町時代以来江戸時代を経て現在に至っていることになる。

しかし，Ｉ区で検出した８世紀のSD 06・17は，先述のとおり主軸方位がN32°Wと，丸亀平野の条里地割に極めて近似しており，この時期には条里制の影響下にあった可能性をもつ。また，中世の集落と同時期と考えられるⅡ区東端の大溝SD 01も，主軸をN30°Wにとる。さらに，Ｉ区東端の江戸時代中期の大溝も主軸をN31°Wにとる。

このように山南遺跡は，丸亀平野の条里地割に則した時期と，異った地割とが併存した時期を経て，現在の地割に至ると考えられるが，出土遺物の詳細な分析から，各時期の遺構と条里制との関係について，さらに検討を深める必要があろう。

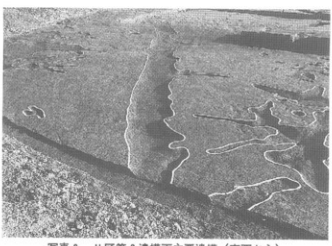


写真９　Ⅱ区第２遺構面主要遺構（南西から）

報告書抄録

ふりがな	けんえいじゅうたくけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさかいほう　　やまみなみいせき
書名	県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度　山南遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	中西　昇・島田英夫・糸山　晋
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒762－0024　香川県坂出市府中町南谷5001-4　　ＴＥＬ0877-48-2191
発行年月日	1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
山南遺跡 やまみなみいせき	香川県 善通寺市 生野町 ぜんつうじし いくのちょう	37341		34°12′43″	133°47′44″	平成10年 ６月１日 ～ 平成10年 12月25日	2,780㎡	県営住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山南遺跡 やまみなみいせき	集落跡	弥生時代前期 弥生時代後期 古代前期 中世後期 近世中期	溝状遺構，風倒木痕 溝状遺構 溝状遺構 掘立柱建物跡，柵列 柱穴群，土坑，溝状遺構 溝状遺構，柱穴群 土坑	弥生土器，打製石鏃 弥生土器 須恵器 須恵器，土師器 青磁，白磁，銭貨 染付，陶器，土師器，瓦	

県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
平成10年度

山南遺跡

平成11年３月31日

編集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
発行　香川県教育委員会
　　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
印刷　セキ株式会社